

黒田武志善光寺前住職が発願し発刊された『成寿』も四十四巻を数えます。

檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

「おもてなし」の心。「日本の心」の大切さを母校である駒澤大学茶道部の学生に向けて説かれた一文です。

駒澤大学茶道部五十年に寄せて

茶 禅 一 味

善光寺住職 黒 田 武 志

夏は涼しく冬暖かに

刻限は早めに

降らずとも傘の用意

相客に心せよ

茶は服のよきように点て

炭は湯の沸くように置き

花は野にあるように



これは、茶道を学ぶ方ならきつと誰もがご存じの、茶聖・利休居士の教えられた七則です。

学生（駒澤大学）の私が初めてこの教えを知り、一語、一語に内包された深い人生哲学に抱いた感無量の思い——それは、半世紀たとうとして今も鮮やかに胸に甦ってきます。

利休居士とその茶の湯を伝える「茶道の聖典」とも称される『南方祿』には、居士の尊い教えが数多く残されておりますが、七則は、私たち人間の、根源的な生きる姿を教えてくださいなさっているように思います。

今から四百年以上前、ある人が利休居士の茶の湯の心持ちの極意・秘事を尋ねたときに、居士はこの言葉を残されました。あまりにもあたりまえのことのようで、秘事でも何でもないように感じたその人が、

「それくらいのことなら、私も存じておりますが」

と不服そうに言うのと、利休居士は静かにこうお答えになられました。

「それでは今私が言ったように、私を招いてくださいませんか。そうすれば、私はあなたの弟子になりますよ」。

あまりにもあたりまえのように思えたこと、それが実は、実践するにはとてつもなくむずかしいことだと、そのときその人は気づいたことでしょう。

この話を、大徳寺の笑嶺宗訴という、利休居士の参禅の師が聞き、

「利休の答えはもつともなことである。昔、唐の時代の代表的な詩人・白楽天が、名高い鳥窠^か禅師に、〃仏法の極意とは何ですか〃と尋ねたときに、諸^{しよ}悪^{あく}莫^ま作^{さく} 衆^{しゆ}善^{ぜん}奉^ぶ行^{ぎやう}〃とお答えになった。これは、——もろもろの悪をなさず、あらゆる善行を行え——というごくあたりまえのことである。白楽天が、〃そんなことなら三

歳の童子でも知っていますよ〃というのと、鳥窠^{ちようか}禅師は、〃三歳の童子でも知ってはいるが、さて、八十歳の老翁でも行うことはたいへんむずかしいことである〃とおっしゃった。白楽天はひどく自分を恥じて、深く和尚に帰依したという。利休の答えはそれと同じことだよ」

と語られたといえます。私も、仏の道を選び歩んで四十数年……：まだまだ、日々、修行の毎日であり、これでよしと感じたことはありません。それは、お茶の稽古のたびにも思ったことでありました。ただ、未熟ながらも学び続けていると、一服のお茶をいただく——そのことのために命をかけた利休居士の、そして先達の茶人たちの生きよう^かに思いをはせ、いかに何でもないことを大切に生きてきたかということに感動し、心が浄われていく感覚を味わうことができるようになりました。

わが国に喫茶の風習が伝わったのは、千二百年前の平安後期といわれます。鎌倉時代には、栄西禪師によつて、茶の湯としての法が中国よりもたらされ、はじめは禅院で行われていたものが次第に当時の大名たちの生活に取り入れられていきました。このことがお茶と禅宗が深く結びついている端緒となっております。中国においては良薬あるいは娯楽であったお茶を「茶道」という精神文化にまで高めたのが、桃山時代に生きた宗匠・利休でした。

大坂・堺の納屋衆（堺の富商）に生まれた利休居士は十七歳のときに茶匠北向道陳に茶の湯を学び、またその紹介によつて竹野紹鷗に師事して奥義を究めました。この紹鷗師の指導と自らの研鑽によつて工夫し、この間、大林宗套、笑嶺宗訴などの師について参禅修行を重ね大いに悟るところがあり、抛筌斎の

号、宗易そうえきという法名を与えられました。筌とは魚をとるウケのことで、その筌を投げ捨てるといふ意味の名は、魚を得てしまえばもはや魚をとる道具はいらない。悟りを得たならば、その悟りすらもわすれてしまふという、利休居士の境地の高さがうかがえるような気が私にはいたします。

利休居士は、

「茶の湯を習うは仏法を習うなり」

と語っておられますが、まさに茶禅一味、その一挙手一投足、戸の開け閉めにいたるまで、その物事を通じて自己をみつめ、自己をならい、真実の自己に極めていこうとする姿勢は、私も学んできた禅の修行そのものなのです。道元禪師も、「仏道をならふといふは、自己をならふなり、自己をならふといふは、自己をわするるなり、自己をわするるといふは、万法まんぼうに証せらるるなり。自己の身心しんじん、お

よび陀己たごの身心をして脱落せしむるなり」と言われましたが、禪とは、自己の奥に向かつていく心の旅であり、表面的な知識ではなく、体験から人間の本質、すなわち、人間がいたい何であるかを模索していく試みであるといえます。己の心のあり方を学ぶ——これは、利休居士のおっしゃった「七則」の深い哲学だと思ふのです。

人間として自然にあることの尊さを知り、何かに縛られたりたらわれたりすることなく、あるがままに生きていく。いくら文明が発達し、時代の流れが変わろうとも、花が美しいと感じる心は幾千年たとうとも、国籍や性別が異なろうとも普遍的に変わらぬ、人として生まれながらに誰もが持つ仏性です。

七則に充ちている相手を思いやる心、それは世のすべてのものに感謝ができたとき、生かされていることに感謝できたとき、自然に生まれ

るものであり、何ら見返りを求めない美しい魂です。すべてのものに感謝したとき、私たちは、すでに自分が満ち足りていることに気づきません。足ることを知れば、それ以上の何らかの飾りつけや贅沢は、まったく必要ないものであり、そこには美しささえありません。

華美な飾り、奢り、贅沢な心をどんと削ぎ落として、磨いて、そして最後に到達した、大宇宙に溶け込んでしまう自然の美を尊ぶ精神で「侘び」という世界を創りだしていった利休居士は、まさに無限の大きさを持った禅僧であり哲学者であつたといえましょう。

豊臣秀吉の台頭に従つて茶名を挙げ、天下一宗匠と称せられることとなる利休居士ですが、絢爛豪華を抑え、枯淡の中にひとかたならぬ英知と王侯貴族をしのご気概を持つ「侘び」の精神を持つ、超越した茶人を、秀吉はどれほど憧れ、そして、畏怖したことでしょう。

利休居士が点前をすると、時が幽玄な優美さに溶けていき、茶室は一つの小宇宙と化し、茶具も火も湯も花も風もみな利休と一つになって、雅な調和を保ち、そのまま次元を超えて昇華していく……自分をはるかに超越した、あまりにも異質で尊い人を目の前にするたびに、秀吉は金色に輝く豪華さのみを求めた自分との違いに、みじめな気分を味わっていったのではないでしようか。

憧れや羨望はやがて、嫉妬へと変わり、正しい人間としての見方ができなくなっていく天人は、とうとう捉えどころのない利休の正体をつかめないことに焦り、自分の目の前から消し去ってしまおうとしました。利休居士が秀吉の命により堺に蟄居し、京に呼び戻されて自刃したのは、居士が七十歳のときのこと。私は思うのです。この世での生を終わるその瞬間まで利休居士は、秀吉の仏性を観じ、何の恨みも未

練も残さず、それどころから感謝の心を抱いて安らかに逝かれたのではないかと。

家は帰らぬほど、食事は飢えぬほど。

茶の湯とは

ただ湯をわかし茶をたてて

飲むばかりなる事と知るべし

頂点まで究めた人が、究めつくして戻ってくる原点が、残されたこれらの言葉に凝縮されているような気がします。茶道というのは、禅の思想の中に日本人ならではの美意識が付随し、利休居士ほど超越した人物でなければ一生かかってもそれを完璧には体得することはできない道なのかもしれません。しかし、人間として何をおもい大切に生きていったらいいのかを学びながら生きていくということほど尊いことはないとは考えます。お茶を通して、真の自己を学ぶ―

—そうした精神が日本人の中には息づいており、戦後の混乱からもみごとに立ち上がる事ができ、救われてきたのだと思うのです。

昭和二十六年、駒澤大学茶道部は、利休居士の教えられた四規わげいせいじやく「和敬静寂」を根本精神とし、発足、以来、顧問・鈴木宗保先生、講師・鈴木宗幹先生を始め、多くの諸先輩方の御尽力によって、脈々と五十年続いてまいりました。

和敬静寂——これはまさに禅の心に通ずる茶道精神そのものであります。それは、人の生きる道そのもの・心を高める精神修養の道そのものといいかえてもよいと思います。

和——調和の心、人間同士和し合う心の大切さ。和は茶道の本質です。相手を思いやる心のこもった作法の中から生まれる和らぎ、和やか

さ、慎ましやかさ。あらゆる人と人との交流、たとえば亭主と客、夫と妻、親と子、民族と民族……も、この「和」を尊ぶ心され忘れなければ、大自然、大宇宙とも調和することができ、宇宙の法則に反する争いごとは、世の中からいっさいなくなるはずなのです。利休居士の時代、茶の湯を学ぼうとする者は、大名や裕福な商人たちでした。たとえどんなに身分が高くても、刀を置き、頭を低くしてにじり入る、このことによって自分の地位ではなく人間性に尊きをおき、すべての人が平等であるということを認識する異空間、それが茶室だったのです。現代ではとくに、この「和」の心の大切さをあらためて人は学び直してみるべきだと私は考えます。

敬——和とともに大切なのは、相手を敬う心です。茶の湯はあらゆる面で、敬意と尊敬の精神を必要としています。これは、無理にそうあ

ろうとしなくても、「今現在のこの方とお逢いするのは生涯でただ一度きりのこと。この茶会は生涯でただ一度きりのものである」という一期一会の精神を持つ人ならば、自然に現れる心の動きだと思えます。一瞬一瞬は、唯一、このときだけ、大切に生きる。今、今、という時の重要性を理解していれば、おのずと人に対しても自分を取りまくすべての自然に対しても——一輪の花、一滴の水に対しても——、敬意が、そして真心が生まれるものだと思います。

清（静）——客が到着する前に、細心の注意を払って露地に水を打つ。このことによつて清められるのは、その人の魂だと私は思います。茶室にいるひととき、日常の雑事から離れ、心のすみずみまで清められていくような気がいたします。さまざまな垢を削ぎ落としたとき、ここに自己の本質を見つけることができるので

す。その清らかな魂を、どんな日常にいても忙しさの中にいても持ち続けることが修行であると私は思うのです。

寂——「禪」というのはサンスクリット語で、心静かにする」という意味です。どんなことがあつても動じず、とらわれず、いつも平静で済みきった状態が、寂に通ずる心だと思えます。動いているときには決して聞こえてこなかった音——水をそそぐ音、釜を鳴らす松風、そして、外からではなく内からの静かな声。茶禪一味、その声に耳を傾ける時を私たちは持つことができなのです。盲目的な激情を捨て、私たち本性は、みな仏性だということを自覚できるはずなのです。

「和敬静寂」という四つの言葉にこめられた奥深さを、茶道部に籍をおいた方々はその後の人生で、いつそう深く味わい、どんな境遇にい

たとしても一生の財産として子に孫に伝えていかれていることでしょう。

茶道部創立当時から私たちを指導して下さった鈴木宗保先生は、この利休居士の精神をそのまま我々に伝えてくださった偉大な師でありました。明治十五年にお生まれになり、明治四十四年より京都裏千家で修業、大正五年には裏千家業躰とられました。茶の湯に関するご本も数多く出版なさり、多くの門弟に愛されながら昭和五十五年九月、数え年九十九歳でこの世での生を終わられました。空前ともいえる茶人のご長寿であられました。宗保先生の句歌集『太翁』を読ませていただくと、先生の、あまりにも自然体で一瞬一瞬を大切に生きてこられた姿が現れており、感動がわき上がってまいります。門弟一同による『太翁』のあとがきには次のように書かれています。

『大先生は朝がたいへん早かったです。弟子ががんばって、かなり早く馳せ参じて、それより一段早く炉に火を入れられ、水屋の準備もすっかり終えられて、冬ならば釜の上に新聞を広げて、コタツ代わりに暖をとっておられました。

——中略——最晩年の大先生は、厳しい面よりも、ほのぼのとした温かい慈愛の方が勝っておりましたが、お亡くなりになる前の年につけられた紹鷗棚の稽古は猛烈果敢でした。総員総点検で弟子どもは震えあがりました。しかしこれは特例で、晩年は二、三番稽古をつけられるとポイと立っていかれて、茶の間でサラサラと短冊を認められ、出来がよいとニコニコしながら稽古席に再出馬され、ポイと誰かの膝の上にそれを投げつけられるのです。そうしていただいた短冊が幾つか積もって今回の句歌集の一端をなしているのです……』

目を閉じれば、なつかしく、宗保先生の仏さまのような慈愛に満ちた笑顔が、瞼の裏に浮かんでまいります。私にとつても、きつとみなさんにとつても青春時代の輝かしい一シーンの、尊い出会いでありましょう。



照りつづく露地をぬらして朝茶かな
四分の一松よろよろと吹かれ居る
冬至湯の肩までいれて九十四

私が先生の境地に達して冬至湯の肩までつか
るには、まだ三十年の月日を待たなければなり
ません。

「あの人にはお茶がある」という表現があり
ますが、さりげない仕種や動作の中に、利休居
士の魂を感じさせていただけの先生でありまし
た。それでもちろん、その後を受け継がれた若
先生である鈴木宗幹先生にも、宗保先生の茶道
精神・生きる姿勢が息づいておられました。そ
して私たち茶道部の門弟に、全情熱を傾けてご
教授くださったのです。

五十年——一口にいいましても、一世紀の半
分という長きに亘って、世の中の流れにとまど

うことなく伝統を維持し続けるといふのは、並大抵の努力ではなかったと思います。

創立当時の諸先輩方が作ってくださった「茶道規約」が現在も後輩にほとんど変わることなくたしかに受け継がれ守られていることも、それがあたりまえとは思わずに、感嘆と驚きを感じるものであります。

昭和三十四年に駒澤大学を卒業し、大学院に進み、その後、二十歳代の後半では、雨風にさらされてほとんど無一文の状態での全国托鉢行脚を体験しました。利休居士のおっしゃった「家はもらぬほど、食事は飢えぬほど」にさえも届かない野宿生活の中、厳しい現実打ち負かされそうになりながらも、茶道部での日々で心身に浸透した和敬静寂の根本精神が、いつどんなときも生きてくれたのです。私はこのときの体験で、自然から受ける恩恵、自分が活かされて

いる尊さに気づくことができました。以来、苦しいことも嬉しいこともすべてを超越して、来るもの皆よし、すべてでありがたいという境地に達することができ、仏の教えの真の意味を実感したのです。ほんの少し、道元禪師に、そして、利休居士の魂に近づけたような思いがし、それと同時に自分の弱さ、無学さを思い知り、あらためて自己を高めるため修行し直したのでした。

昭和四十二年、茶道部が時代の転換期を迎えている頃、私は三十歳で布教と修行のためにアメリカに渡りました。高校生の頃の私は、ただ漠然と、無限の可能性が秘められているような超大国に憧れを抱いていただけでした。しかし、茶道を学び、禪を学び、托鉢行脚で自己を学んだ私は、タイやアメリカに暮らすほどに、深く日本人としての誇りを持って茶道精神や禅の思想について話せるようになりました。西洋人の

目で、日本の文化・宗教を見つめ直してみると、そこにあつたのは大きな驚きと新しい発見の連続でした。継承された伝統的なものが素晴らしいのはずか。それは、ただ長く続いているから価値があるのではなく、どんな時代においても何世紀もの間、頑なにそれを守って後世に伝えようとした方々の努力が光り輝いて息づいているからなのです。

我が茶道部についても、まったく同じことが言えると思うのです。

今から一世紀近くも前に岡倉天心が『茶の本』を英語で書き、日本の茶道精神を西洋に伝えたのも、西洋でさまざまな体験を積み、あらためて日本の素晴らしさを再発見したからこそではないでしょうか。その時代というのは、日本人がこぞって西洋化しようとしていた頃だったというのに……。

終戦後五十余年、西洋文明とその考え方にど

っぷりつかりそうになる時代の中で、温故知新の精神で誇りを持って茶道部を絶やすことなく継承してきた先生方、先輩後輩のみなさんに、私は深い敬意を払わずにはいられません。

今、経済大国となった日本はさまざまな意味で世界から注目されています。科学の進歩はめざましく、コンピュータやLSIによって、世界との距離と時間はどんどん短縮されました。そんな時間の中で、私たちは常に断片でものを見る習慣がつき、全体像を見ることが苦手になってしまいました。次々と展開する新しいことばかりに心奪われ、自然との触れ合いや美しさ、宇宙の法則の偉大さに感謝するよりも、自分の自己的な欲ばかりに興味を持つようになってしまいました。国や会社の発展だけを目標にがむしゃらに走った結果、金銭的には豊かになり生活は便利になりました。なのに、人々の表情がゆつたりと満たされていないのはなぜなのでしょう

よか。想像もつかないような破壊力を持つ兵器を使った戦争の脅威、しわじわ進む環境破壊、飢えで泣く子どもたち……グローバルな視野に目を向けたとき、そこには不安が広がっているのです。世界の全体像を見渡せば、日本人が昔から大切にしてきた和の精神を二十一世紀に向けて広げることが、世界平和のためにいかに重要な使命かということがわかってくると思うのです。

茶道部創立五十年、きつと二十一世紀には、六十年、七十年、百年と祝えることでしよう。

創立当時の美しい茶道精神が、必ず生き続けているはずですよ。

めまぐるしく変わっていく時代の中で、この十六世紀から変わらぬ茶室という空間に身を置くとき、この上ない安らぎに満たされてまいります。茶道は私たち日本人の心の原点です。調和を基として雅な美しい文化の国、それが私たち

の日本ですよ。

「どうぞ、お茶を一服召し上げれ」

そうした意味のある『喫茶去』は、茶道部伝統の機関誌名でもあります。歴代茶道部員が誰でもその書名をなつかしく覚えていて、ことごとく「お茶でもいかが」の精神によって素晴らしい人間関係や出会いを人生の中で築きあげていることですよ。さらに、さりげなく、しかし一所懸命相手を思いやる「七則」の精神が子から孫、後世へと生き続ける限り、時代、国境、民族、文化、習慣、宗教……、人と人との間にあるかのように見えるどんな垣根も、またたくまに消えていくと思うのです。

日本人として生を享け、永い時間をかけて育ててきた禅・茶の湯という心の宝。それを私たち一人ひとりが持っています。茶道部を卒部していった方々の数、現部員のみなさんの数は

合わせても、まだ、世界の人口から見れば、針で突いた点にも満たないかもしれません。しかし確実に世界平和の大輪を咲かせる小さな種蒔き人となる方々であり、二十一世紀を救う方々であると私はかたく信じております。



